

## 研究ノート

# 宗教を前提にした福祉のあやうさについて — 「人間福祉の哲学」への問い—

A study on risk of welfare based on religion  
A query about "The philosophy of human welfare"

八窪 清

**要約：**「人は、生きるために食べるのか、食べるために生きるのか」というラテン語の格言がある。同じことは、「人は、食べるために働くのか、働くために食べるのか」という問いに置き換えることができよう。人間相手の仕事、特に日常的に人の生き死に直接向き合うことの多い福祉労働者にとっては、働きの意味を知ることは重要であり、30年間の福祉労働の中でそうできたかどうかは措くとして、この問いを必携のフレーズとして受け止めてきた。

本稿は、1979年にノーベル平和賞に輝いたマザー・テレサの偉業に驚嘆しながらも、彼女を「人間を具体的・実際に愛した」先達として紹介する秋山論文に疑問を投げかけるものである。人間の尊厳性は<人間>の中には存しない。あくまでも一人ひとりを名指す行為の中でそれは実現される。ましてや、だれかのためにだれかを愛するなど論外である。物乞いやホームレスの中にイエスをみるなら、それは人権侵害に充たる。人間の尊厳性の根拠は非代替性にこそあるからである。

なお、本稿の目的は秋山論文の過誤を正すことにあるが、結果的に、利用者をデジタル化し、匿名化して“量”に置き換える契約の時代を迎えた商業主義的福祉への問いかけでもある。

**Key Words：**ペルソナ、福祉労働、仮面をかぶった神、人間の尊厳、定言命法

### はじめに

文字に残された人類最古の労働観は、筆者の知る限り旧約聖書の中にある。「地は、あなたのゆえに呪われよ！あなたは、苦勞して[地から]かてを取るだろう、いのちのつづくかぎり。地は、あなたのために、いばらとあざみをはやし、あなたは、野の草を食べねばならない。ひたいに汗して、あなたは、かてを得るだろう、土にかえるまで<sup>1)</sup>」。いわゆる失樂園物語の一節である。ヘブライ民族は、労働を人間が神に叛いた罰として位置づけていたことが読みとれる。一方に、「召命」(calling)としての労働観がある<sup>2)</sup>。いずれも、神を前提の労働観である。小論は、宗教を前提にした福祉労働の陥りやすい誤謬性と無効性についての試論である。

### 1. 誤謬性について

貧しい人々の中の最も貧しい人々に、超人的な福祉的実践を果たしたマザー・テレサ(以下、マザーと略)の偉業に触れながら秋山は、その著「人間福祉の哲学」の中で、「人間を『具体的・実際に愛する』ことができるタイプ」として、多くの社会福祉従事者を挙げ、そのモデルの一例としてマザーを紹介している<sup>3)</sup>。続けて秋山は、「『神のペルソナ』という表現と思想がある。ペルソナ(persona)とは仮面という意味であり、英語のパーソナリティの語源であり、ラテン語である。この神のペルソナというのは、物乞い、ホームレス、重症心身障害児の仮面をかぶって神がそこに寝ていて、『あなたが働きかけないか、働きかけるか、私は見ている』という神からの試験のことである。ホームレスが寝ているその後ろに神様の顔があり、『お前は今日も私を見捨てていくのか』と問いかけているのである<sup>4)</sup>」と断定的に述べている。ここには、「calling・vocation」的労働観がある。

二つの点で秋山の過誤を指摘したい。一点目は、personaを「仮面」に限定していることと、「神のペル

ソナ」という思想があると述べていることについてである。personaは確かに「仮面」を意味するが、正しく「人格」をも意味する（personaはper～を通して+sono-ere響くの新造語である。筆者はここから、人は人と響きあってはじめて人格的存在となる、とpersonaの語源を受け止めている）。秋山が、personaを「仮面」と訳することにこだわったのは、その後すぐくる「貧しき人々の仮面をかぶる神」につなぐ意図があったからであろう。ところが、キリスト教界で「神のペルソナ」という場合、それは三位一体、すなわち、唯一の神でありながら、聖父と御子と聖霊の三つのペルソナがあることをいうのであって、「貧しき人々の仮面をかぶる神」として表現し、これを「神のペルソナ」とする思想はない。

二つ目は、具体的・実地的に一人ひとりへの愛を実践したモデルとしてマザーを紹介する同じ秋山が、その後でマザーの実践例を引きながらマタイ福音書25章40～45節と関連づけ、われわれの前にいる「物乞い、ホームレス、重症心身障害児は、実は、そのような姿をしているが、仮面をかぶっている神<sup>5)</sup>」だと記述していることに対してである。ここには論理的無節操さがある。

確かに、マザーの言行を記した書籍の、ほとんどといっていいどのページにもこの思想を彷彿とさせるような言葉が列記されている。「イエスのために、イエスに向かって、イエスとともにそれを行うのです。貧しい人のさげすまれた姿の中にあるイエスに奉仕なさい<sup>6)</sup>」、「私たちの食物、衣服、何もかも貧しい人々と同じようであればなりません。なぜなら、貧しい人々はキリストご自身なのですから<sup>7)</sup>」、「イエスは私たちのもとに飢えた人の姿、裸の姿、さびしい人の姿、アルコール依存者、麻薬中毒者、売春婦、路上の物乞いの姿でおいでになります。(中略)もしも私たちが、その人たちを見殺しにするなら、手を差し伸べないなら、それはイエスの方を見殺しにしたことになるのです<sup>8)</sup>」、「死の寸前の老婆をつれてきて、マザーのすることをじっとみていた仏教徒は、『あなたの宗教は本物の宗教にちがいない。あなたをこんなふうに働かせるのだから』と、マザーの手を握り、大声で叫んだ。マザーは、うれしそうににっこり笑っていった。『そうですとも、私はいまキリストのおからだにふれているのですもの』<sup>9)</sup>」

これらの記述を目にするなら、「具体的・実地的に一人ひとりへの愛を実践した人」としてマザーを評価する秋山の論理の矛盾点にすぐ気づくであろう。物乞い、ホームレス、重症心身障害児は、一人ひとりの「その人」と

してではなく、単にイエスの身代わりとして愛されていたにすぎないわけで、物乞いやホームレスが「具体的・実地的」に愛されたことにはならないからである。

だれの追従をも許さないマザーの偉業に泥を塗るつもりは毛頭ないが、あえてここでマザーの土俵に上がるなら、十字架は、十字架として意識されるとき、もはや十字架ではなくなるということである。なぜならば、その苦しみと引き換えに、終わることのない永遠の幸せが約束されているなら、ソロバンは十分にはじかれているからであり、それはイエスの贖罪の無償性を説くキリスト教的価値と相容れなくなるからである。マタイ福音書25章40～45節のたとえ話も注意深く読むならば、救われる側にいる人たちも反対側にいる人たちも、そうしたり、しなかったりした相手がイエスであったことを知らなかったことに気づくであろう。蛆に食われて道端に倒れている人、物乞いの中にイエスをみてはいけぬのである。神がいるとして、ご褒美（エサ）で善行を勧めるような子ども騙しの神は神ではない。そのような語り口は、deus ex machina—ギリシアの芝居で、突然機械仕掛けでとびだして結末をつける神—的の神を登場させることによって自分のことばの説得力のなさを隠微しようとする、えせ宗教家の常套手段なのである。古い、新しいで論説の正否を区分する愚を犯してはならないが学問的にはマザーは前時代的神学の中にあつたといわざるを得ない。連日、道端で死んでいく貧者や病者への世話に忙殺されて、神学論争に時間を割く暇など彼女にはなかったであろう。だから、活動の意向に疑議が残るからという理由で、マザーの品位を貶殺することは許されない。マザーによって無数の寄る辺ない人々が、感謝のうちに最期を迎えることができたのであり、いまなお、その精神を引き継ぐ多くのシスターたちが、無数のいと小さき人々の中に働いているからである。

このことについては、ハンセン病訴訟を支援して、光田健輔の非を厳しく告発<sup>10)</sup>しながらも「光田健輔の持つヒューマニズムを批判できるくらいの人権尊重を自分の中に持ち日々実践行動をし、人権についての思想を国民の中に育てる努力をせずしては、光田を批判することは難しいのではないかと、私は思う<sup>11)</sup>」と真摯に述べる徳永進同様、筆者もマザーを鞭打つことはできない。むしろ、その遺徳がいつまでも記憶されることを願う。

しかし、秋山の場合は違う。なぜなら彼の著書は、わが国の福祉を背負う若者たちにとっての教科書的役割を果たすものであり、「物乞い、ホームレス、重症心身障

害児の仮面をかぶって神がそこに寝ている」とする発想の福祉観が蔓延するとき、福祉関係者にとってのユーザーは手段化され、物化される危険に貶められかねないからである。ある人は、今日の多くの若者たちは、「神の死」の時代を生きており、とり越し苦労だと笑うかもしれない。しかし、神はいつでも、どこでも容易に金品や昇進の機会に変わり得る。

秋山は、物乞いやホームレス、重症心身障害児の中に「仮面をかぶった神」をみたあとで、そのまま続けて「このことは人間の尊厳ということに関わってくる。哲学者I. カントは言う、『全て諸物は価値を有するが、ひとり人間のみは尊厳を有する』と、ケーキは甘い、ダイヤモンドは硬くて美しいなどと諸物は価値をもつが、人間のみは丸抱え的な『尊厳』を持つ。このことは人間を価値的にみてもいけないことを教える。価値的にみるならば、頭のいい人、お金をもっている人、足の早い人が「偉い人」ということになる。カントの二つの実践命題がある。第一命題は『全ての人を目的として手段とするなかれ』（人をうまくあやつって自分の利益の手段としてはならない）、第二命題は、『自分がしてもらいたいことを人にもしてあげなさい（なぜ、これをカントに結びつけたのか筆者は理解できない。これは聖書にも孔子の教え等にもある）』（黄金律）ということである<sup>12)</sup>』と、カントの定言命法でこの項を結ぶ。物乞いやホームレス、重症心身障害児の後ろに神の顔を見るならば、明らかにこの人たちは一人ひとりの、「その人」としてではなく、神の代わりに愛されているのである。つまり、道端に倒れているその人たちは、その人たちが神を愛するための手段として利用されたのである。ここでは、「独自性」、「一回性」においてその尊厳が根拠づけられる、人間存在の「一人性」はまったく無視されたままになっている。もう一人のイエスとして遇された道端に横たわるその貧者は、手を差し伸べた人が永遠の幸福を得るための道具として利用されるためにそこにいたことになる。実に、秋山はここで、かけがえのない一人ひとりを手段化する論理をよしとし、それを傍証しようとしてそれと相矛盾するカントの定言命法をもちだすことによって、二重の過ちを犯していることに気づいていないのである。われわれが手を貸すのは、だれかが手を必要としているからであって、自分が神の国に宝を積むためであってはならない。間に人・モノ・神を介在させてはならないのである。目的と結果を取り違えると、かけがえのない人間を踏み台にし、定言命法を地に落とすことになる。

## 2. 無効性について

もし、神が存在するならば、すべての答えはその中にある。しかし、そのような神は存在しない。こういうからといって神など存在しない、というのではない。この命題に対しての答えは「語りえぬものについては、沈黙せねばならない<sup>13)</sup>」という意味においてである。神について語ることは、自分を神にするに等しい。まさに洗神行為である。それゆえ、たとえある国家なり、集団なりの構成員が自主的、主体的に同一の宗教を奉じていたとして、その指導的位置にあるものが、「神、かく語りき」と説くことがあったとしても、その根底に信仰が前提にされている以上、客観的にはなにも意味をなさない。この辺りの事情を確然といいきるのは、同じウイトゲンシュタインである。彼は、「世界の意義は世界の外になければならない。世界の中ではすべてはあるようにあり、すべては起こるように起こる。世界の中には価値は存在しない。一かりにあったとしても、それはいささかも価値の名に値するものではない。価値の名に値する価値があるとすれば、それは、生起するものたち、かくあるものたちすべての外になければならない。生起するものも、かくあるものも、すべては偶然だからである<sup>14)</sup>』という。ここでいわれる「生起するもの、かくあるもの」とは、スコラ的表現を用いるならば、ens contingens（偶有的有、現実にあるが無いこともあり得る有）、「語りえぬもの」とは、Ens Necessarium（必然的有、現実であり、無いことがあり得ない有）に言い換えることができよう。いま現実であっても、無いことも可能である存在と、無いことがあり得ない存在とは異次元の世界である。ここに、calling 的、vocation 的福祉労働の無効性が露呈することになる。

## 終わりに

宗教（神）を前提にした福祉労働の誤謬性と無効性について述べてきた。しかし、人間は無意味に耐えられない存在であるといわれる。ではいったい人はどこに労働の意味を探ることになるのだろうか。だれもがシーシュポス注1)になれるわけではない。否、彼は文学上の英雄であって、だれもシーシュポスになることはできない。だから、人は働くために食べるのか、食べるために働くのか、と問う。マズローは欲求の第5段階＝自己実現の中に労働の意味を規定するだろう<sup>15)</sup>。V. フランクルは、「われわれの実存の独自性を形成する人格的なもの、特殊なものが職業活動のうちにあらわれて生命を有意義に

するかどうかが問題なのである。医者や看護婦にしても、彼らがその義務によって定められた技術的なことをするだけではなく、その境界を超えて一層人間的なこと、人格的なことをする時に初めて、生活に職業から意味を与える機会が始まるのである<sup>16)</sup>」と労働を意味づけた。

しかし、裁判の場で被告人がどんなに身の潔白を証かそうとしても、ただそれだけでは何の意味もなさないように、人間が人間万人に納得されうるような労働の意味づけなど不可能である。一見、なるほどと頷ける内容を包含する論説があるとしても、いずれもそれらは願望でしかありえない。多分、人々は労働の意味に限らず、それが教育であれ福祉であれ、ひそひそ話のなかで相互に納得し合いながらしかそれらを語ることはできないであろう。もちろん、ペッシミスティックになることはない。それは、「限りある存在」(ens contingens)としての人間の当然の姿であるからである。そして、人々がその認識にいきつくとき、「・・・彼女の体は、虫や蛆に覆われていたのです。私は愛情のすべてを注ぎ、できる限りの世話をしました。そしてベッドに寝かせてあげた時、彼女は私の手をとり、美しくほほ笑んだのです。こんなに美しい笑顔を、私はそれまでに見たことがありませんでした。『ありがとうございます』と彼女はそうひとこと言って、静かに息を引き取ったのです…<sup>17)</sup>」というマザーのことは感動の裡に受け止めることができるであろう。

#### 注

1) ギリシャ神話のシーシュポスは、神にそむいた罰として休むことなく岩を転がし、山の頂上まで運ぶことを命じられる。しかし、ようやく頂上まで運び上げても、岩はそれ自体の重みですぐにふもとまで転がり落ちてしまう。そうすると彼はまたゼロからスタートしなければならぬ。この無益な、希望のない労働を永遠に続けることが、神が彼に課した罰であった。

カミュは、この神話を下敷きに「シーシュポスの神話」を著した。この中で彼は、自分の置かれた境遇を呪うことも絶望することもしないで不条理を直視し、雄々しく生きていくシーシュポスを人間の中の人間(実存的人間)、英雄として位置づけている<sup>18)</sup>。

#### 文献

1) 『旧約聖書』バルバロ訳 ドン・ボスコ社 1964年 創世の書 3章 17～19節

- 2) 秋山智久他『人間福祉の哲学』ミネルヴァ書房 2004年 P. i
- 3) ibid. P.19
- 4) ibid. P.24
- 5) ibid. P.24
- 6) ホセ・ルイス・ゴンザレス・バラド『愛と祈りのことば』渡辺和子訳 サンマーク出版 1997年, P.10
- 7) ibid. P.55
- 8) ibid. P.65
- 9) 沖 守弘『マザー・テレサ あふれる愛』講談社 1996年 P.26
- 10) 沖浦和光, 徳永 進『ハンセン病』岩波書店 2002年 P.6-11
- 11) ibid. p.13
- 12) 秋山智久他『人間福祉の哲学』ミネルヴァ書房 2004年 P.24～25
- 13) L. ウイトゲンシュタイン『論理哲学論考』岩波文庫 2007年 P.149
- 14) ibid. P.144
- 15) フランク・ゴープル『マズローの心理学』小口忠彦監訳 産能大学出版部 平成 10年 P.68
- 16) V. フランクル『死と愛』霜山徳爾訳 みすず書房 1957年 P.134
- 17) ホセ・ルイス・ゴンザレス・バラド/ジャネット N. プレイフット編『マザー・テレサの「愛」という仕事』山崎康臣訳 青春出版社 P 181
- 18) A. カミュ『シーシュポスの神話』清水 徹訳 新潮文庫 1970年 P.169